

平成二十八年年度

博士（文学）学位請求論文

内容及び審査の要旨

劉 淙淙

井上靖研究 — 西域小説から「孔子」へ —

皇學館大学大学院

博士(文学)学位請求論文内容及び審査の要旨

劉淙淙氏の博士(文学)学位請求論文「井上靖研究―西域小説から「孔子」へ―」は、井上靖(明治四〇年・一九〇七年〜平成三年・一九九一年)の生涯にわたる作品を展望し、特に古代中国に材を採った作品群を、三部構成のもとに考察したものである。

井上靖の文学には、〈水・川・河〉が作品のテーマとして存在し、それらは詩・小説・エッセイの随所に描かれている。井上文学の、わけても小説を中心に考察する本論文も、そのテーマの中核を成す詩歌・エッセイにまず注目して、論文全体が構築されている。なぜなら、この作家の小説の構想は、まず詩歌・エッセイに胚胎し、その後小説の形式で発酵する傾向があるからである。

本論文では、中国を題材とする主な作品を、前期と後期とに分けて、その考察が進められている。その目次の概略を示せば、次のようになる。

*

序章 ―井上靖の作家的創作方法の特色―

第一部 宿命論としての「楼蘭」

第一章 井上靖「楼蘭」における宿命観

第二章 「洪水」に見られる宿命観

第三章 詩集「乾河道」における廃墟

第二部 井上靖における西域という異境

第一章 「漆胡樽」の成立と西域小説の系譜

第二章 「洪水」における〈渡河〉の意味―西域という異境―

第三章 ふるさとへ帰れない人々―女性像を通して―

第三部 天命論としての「孔子」

第一章 蔦蓋とその役割について

第二章 作品に見られる『論語』の解釈

第三章 井上靖「孔子」における負函の意味

第四章 「孔子」における〈川〉

第五章 井上靖晩年の作品群と「孔子」

終章―〈河・川・水〉井上靖文学に潜んでいるテーマ―

*

以下、第一部、第二部、第三部に沿って、その概略を説明する。

第一部、第二部では、前期作品のうち、中編小説「楼蘭」（昭和三三年）、短編小説「洪水」（昭和三四年）の二作を中心に考察した。この二作の考察にあたり、短編小説「漆胡樽」、詩集「乾河道」を補助線として用いた。これらの作品は、ともに中国古代楼蘭王国（現在、新疆ウイグル自治区）を舞台とする作品である。これらの作品には、共通して〈水〉が人類の「運命」を左右するという特徴が著しく、それは、当時の中国の風土に支配された人々の宿命観と繋がっているという着想が論じられている。

第三部では、後期作品のうち、その晩年の代表的長編小説「孔子」（平成元年）を中心に考察した。ここでは、井上靖の「仁」及び「天命観」が、彼の描く孔子像と、その作品の主題にどのように結びつくかという点について考察を試みている。作品「孔子」の解釈は、同時に作家の論語理解、孔子理解を、確認することにもなる。この作品では、『論語』に描写される〈川の流れ〉は、人類に対する信頼と、未来への希望を象徴するものとして描かれている点に着眼し、晩年の井上靖の「運命」観は、「孔子」を通して、「天命」の思想へと傾いているということを描いた。

以下、具体的に本論文の構成に従って細部を説明する。

*

第一部では、「楼蘭」「洪水」及び紀行文を中心に論じた。研究史によると、井上靖のデビュー作「獵銃」（昭和二二年）に描かれる〈白い河床〉には、死者が生者に与える影響が指摘されている。十年後の「楼蘭」（昭和三二年）に描かれる〈白い河床〉は、〈死の砂漠〉（タクラマカン）のアルカリ性の砂を指している。それは、人の死の問題だけではなく、文明の〈死〉をも意味している。ロブノール（ウイグル語 Toyluq, 湖の意）の水は乾いた。楼蘭の国民は、自然と政治が原因で、〈故郷〉を離れ、故郷喪失者となったのであった。「楼蘭」におけるロブノールは、一六〇〇年の周期で移動し、文明を養い、生命の源として描かれている。なお「楼蘭」の姉妹編「洪水」は、中国最古の地理書『水経注』に基づいて創作された短編小説である。原拠と比較し、「洪水」におけるクムダリヤ（ヘルシャ語 Darya, 海や河の意、ロブノールの上流）は、登場人物索勸らの努力を抹殺し、つまり人知を無視して、文明をリセットする役割を担っている。作家・井上靖は、古代中国の風土と人との関係性を、みずからの作品の中で、

そのように描いた。

論者はこの時期の紀行文や詩集『乾河道』（昭和五九年）に描かれる地名・国名・歴史的イベントなどと「楼蘭」「洪水」の関係を整理する。その結果、詩集『乾河道』に収録された詩作品「決別」に「決別以外、あの大アルカリ地帯からの去り方はなかった」とある点に着目し、それは「白い河床」に象徴される「西域」からの決別を意味するということであつたと指摘する。

第二部では、まず、西域短編小説を中心に論じる。第一回正倉院展での漆胡樽との出会いは、井上靖が西域小説を創作する契機となつた。また、「毎日新聞」の仕事としての、美術随筆「美しきものとの出会い」は、井上靖の独自の審美観を養い、その後の作品の執筆に大きな影響を与える。「洪水」におけるクムダリヤは、この世とあの世の境目として描かれている。主人公・索勸がクムダリヤを渡る行為（渡河）は、主人公が、異郷に入ったことを暗示している。同名詩「漆胡樽」には「民族の意志の暗い流れより逸脱し、孤独流離の道」を歩むというフレーズがある。「漆胡樽」（昭和二五）「異域の人」（昭和二九）「洪水」（昭和三四）「敦煌」（昭和三四）「狼災記」（昭和三六）等、一連の西域小説では、故郷を離れ、異郷に潜む人々が、自我同一性（アイデンティティー）を失つたことが描かれている。特に、西域へと（理想郷）を求めて、ついに客死する人物を描く短編「崑崙の玉」（昭和四二年）には、井上靖本人の、故郷への憧憬が投影されている。即ち「西域」は作家にとって、「故郷」と「異郷」という二重構造を持ち合わせているのではないか。

また、それぞれの西域小説に登場する男性たちは、異民族の女性との関わりが原因で、故郷へは帰れない身となつた。西域小説の女性たちは、男性が自我同一性喪失の、或いは不帰の客となる契機となり原因となつている。これらの男性たちが抱く、故郷への憧憬、帰郷願望が、後期の「孔子」へと引き継がれているとも言えるのである。なお、「洪水」における「アシャ族の女」は、ヘーデン著『さまよへる湖』の翻訳「犠牲をさげた」からヒントを得て創作した人物であると推測される。

井上靖の前期作品の特徴は、四高時代に体験した日本海の砂丘が基層にある。つまり、西域の沙漠には、日本海の砂丘が重なっている。それらはまた、ヘーデン著『さまよへる湖』や>・ヘルマン著『楼蘭―流砂に埋もれた王都』への関心へと連なるのだ。なお、「異域の人」の班超をはじめ、以上の作品の主人公は、いずれも中原（古代中国の中央）から西域へ行った軍人の場合が多い。そこには、「神様！一日も早く帰して下さい」（『従軍日記』）と表現した井上靖自身の叫びが、籠められているかもしれない。彼の、大陸への従軍体験が、西域小説創作の動機のひとつに考えられる所以でもある。

第三部では、「孔子」を対象に論究した。まず、作中の語り手・蔦蓋の人となりとその役割について説明し、次に作品の典拠との比較考察、さらに作品に描かれる隠者の人物の創作動機について考察を進めた。そこには、作家井上靖における『論語』解釈の独自性、「川」の寓意性や象徴性など、従来に見られなかった作品世界が浮かんでくる。また、「孔子」世界の理解を通じて、晩年の作品群「化石」（昭和四〇）「星と祭」（昭和四七）「本覚坊遺文」（昭和五六）との比較から、その共通点と相違点を明らかにした。その結果として、井上靖が晩年に至りついた死生観、人生観、天命観を指摘することができた。

作品「孔子」には、中国古代の「葵丘の盟約」が、重要な事項として採り上げられている。「葵丘の盟約」とは、孔子の生まれる百年前、斉の桓公の時代、他に先駆けて初めて結ばれた葵丘での盟約のことである。その中に「防を曲げる無し」の条約がある。つまり黄河の堤防を破壊工作で決壊させないという約束文のことである。この典故は『孟子』にあり、そこからヒント得て、巧妙に「孔子」の第一章に嵌め込まれた。

作品では、「葵丘の盟約」に敬意を払うため、孔子が弟子たちを連れて葵丘を見学する場面がある。語り手蔣葦は、戦乱中「人間にはなお信じていものがある」と語っている。それは、この「葵丘の盟約」が、これまで堅く守られ、覇者たちは、黄河を戦乱の武器として用いなかったことによるものである。蔣葦は、蔡国の遺民であり、祖国を失った民のひとりである。また「水利技師」の弟子でもある。その設定には、黄河にまつわる「葵丘」のイメージがある。

「孔子」には、『論語』における「逝くもの」と、『史記』『易』『春秋左氏伝』における黄河が採用され、それが独自のな〈川〉として描かれている。蔣葦の解釈によると、「逝くもの」には、人類の明るい未来の到来が暗示されている。黄河に関する「武は、戈を止める」という楚の荘王の言葉が、平和を意味するものとして用いられた。そして、「五十にして天命を知る」五〇代の孔子像が描き出された。また、本来、聖天子が現れる予兆とされる鳳凰が出現しないことを悲しんだ、乱世における孔子の「鳳鳥至らず」という言葉は、蔣葦によると、孔子が「明るい未来」を信じる言葉だと意味付けられている。

ここで、前期の西域小説における〈川〉のイメージと比べると、「孔子」における〈川〉には、信頼、平和など、現代的な課題が書き込まれていることが分かる。また、「孔子」第一章には、中国史上有名な楚国の隠者たち、長沮と桀溺、接輿、荷篠丈人が登場している。しかし、井上靖は、彼らが蔣葦と同じ蔡国の遺民として創作する一方で、彼らの独善思想を批判している。蔣葦は、他の隠者たちと違い、国を憂い、孔子の代弁者として、積極的に人類の未来の為に行動する人物として描かれているのである。

なお、各注釈書によると、「仁」は『論語』のメインテーマであるとされる。蔣葦も「仁」の重要性を説明し、「仁」という字は、人偏に「二」を配している。親子であれ、主従であれ、旅で出会った未知の間柄であれ、兎に角、人間が二人、顔を合わせれば、その二人の間には、二人がお互いに守らなければならぬ規約とでもいったものが生れてくる。それが「仁」というものである。他の言葉で言うところの「思いやり」、相手の立場に立つて、ものを考えてやることである」と語っている。

一方、蔣葦は負函の暗闇にあつて、「天命」とは天に則して諦めることなく、不幸や失敗と戦うという新しい解釈を得ている。『論語』には「天命」に関わる章は二箇所しかない。だが、井上靖は「天命」を「孔子」のもう一つの重要なテーマにしているのである。

なお、「負函」の地名は、『春秋左氏伝』にのみ出ていることが知られている。井上靖は、中国の清の学者崔述と近代学者錢穆の学説に従い、負函が、孔子と葉公（楚の政治家）の出会いの場として設定した。また、楚の昭王が戦死したため、負函は孔子が中原からの引返し地点となったことが示されている。

また、「負函」が孔子一行の〈ふるさと〉として設定されたことは重要である。「漆胡樽」をはじめ、前期作品にみられる西域小説の人物は器物化

され、数多くの城は、無人の廢墟として描かれている。しかし、「孔子」に描かれる「負函」は、「難民の家」として活写され「近き者悦び、遠き者來たる」(『論語・子路・一六』)の町として描かれているのである。「孔子」は全体五章で構成され、(孔子研究会)の問答や語り手蔦蓋の視角から展開される物語である。それは、蔦蓋の旅物語(第一章、第五章)、思い出(第二章、第三章)、『論語』解釈(第四章)から構成される。

ここでの語り手は、井上靖本人の身分的な存在である。二四歳の蔦蓋は、廢墟となった祖国・蔡国を出て宋国へと赴き、土木技師の仕事をする中で孔子一行と出会った。そして戦乱の一四年間、孔子と共に、「二千の国家都市」を巡り、孔子の故郷・魯国に行つた。そして孔子の心喪後、彼は一人で山の奥へ入り、民に向かつて(孔子研究会)を開くのである。晩年の蔦蓋は、孔子の言動についての課題を解決するため、再び「負函」への旅に出る。

蔦蓋は、孤独流離の漆胡樽的な人間ではなく、孔子の教えに感動し、自らの意志で、国々を巡り、「負函」を訪ねた。そして、「ああ、いま、わが故里には燈火が入っている！」と叫ぶのであった。彼の旅程は、「負函」を起点とし、そこを帰還の場とした。まさに、「負函」こそは、彼の心の(ふるさと)だったのであり、また作家・井上靖の行き着く世界となつたと言える。

終章

本論文では、井上靖の前期作品を俯瞰し、その検討を経た後、さらに後期作品を代表する長編小説「孔子」を考察の対象とした。

「孔子」には、歴史上の書物を典拠としただけでなく、作家自身の胃、食道癌との闘病、また六度に及ぶ中国河南省、山東省への踏査旅行の体験が反映されており、井上靖の人生観・世界観が凝縮されていることを指摘した。

また、井上靖晩年の作品群には、(水・河・川)が象徴する世界があり、そこに籠められた寓意も看過できないと考える。前期作品に見られた「化石」に象徴される(人生と川)の比喩、「白い河床」に託された風景と「逝くもの」との対比、「星と祭」における琵琶湖での鎮魂と殯の儀式の類似性、「本覚坊遺文」における「冷え枯れた磧の道」の意味。それらの作品群は、いずれも、初期作品「猟銃」に描かれた(白い河床)と関わっている。また「楼蘭」にも(白い河床)という表現が見られた。

つまり、前期作品に描かれる(川)は(白い河床)に代弁され、それは、無機質なものの象徴であり、そこに生きる人びとは、(器物化)された人たちであった。そこでの人びとは、意志を失い、河の意志が優先される。すなわち人を含む生命体を保持するのは、水の力であり、人ではない。人類の意志は、大自然に対しては無力であり、空しいものだという思想が、前期作品の基調にはある。

しかしながら、「孔子」に描かれる河、あるいは水の流れは、滔々として豊かである。「逝く川」は、これまでの論語解釈に見られるように、無常を象徴するのではない。井上靖最晩年の作品「孔子」では、その水の流れの向うに、希望と安寧とを信じている孔子像が創作された。そして、ここには井上文学の到達した「天命」観が表現されていると思われる。それは、積極的に現実を受け入れ、希望的な未来を導く思想であり、「運命」観、「宿命」観という消極的な受容の仕方と対峙するものである。

【講評】

本稿では、井上靖の前期作品群にみられた〈白い河床〉から、晩年の「孔子」に描かれる〈逝くもの〉としての「大河」へと、作家の心象風景が変化していることを、作品を通じて論証することができた。それは、井上文学における、世界に対する〈否の認識〉からの脱却であり、〈生の肯定〉への変化を意味する。

論者は、これまでに「井上靖『洪水』における自然への畏怖」（『井上靖研究』第一四号、平成二七年七月）、「井上靖『楼蘭』における宿命観——〈白い河床〉の象徴性について」（『皇學館論叢』第四八巻第四号、平成二七年八月）、「井上靖『孔子』における〈川〉の象徴性」（『解釈』第六二巻一・二号、平成二八年二月）、「井上靖『孔子』に描かれる隠者のことば人物たち」（『井上靖研究』第一五号、平成二八年七月）等の論文を公表している。

本論文は、これらの既発表論文を基に、改稿を重ねて完成させたものである。全体として、広域に亘る井上靖の文学世界を通史的に俯瞰し、又横断的に分析を試みたもので、論の展開に煩雑な面が見られるものの、従来の研究史を、みずからの論旨に批判的にとり込みながら、独創的な結論を導き出した。変換ミスと思われる誤植や、書式の乱れ等が数箇所見受けられるものの、中国古典文献や先行研究を丹念によりみ解き、膨大な井上靖全集から関連作品や文献を分析し、論旨を整理して、初期から晩年への文学世界の変化を論証した点は、それらの欠陥を補い、高く評価されるべき内容となっている。

以上を総合的に判断して、本論文は、博士（文学）論文に値するものと認められる。

以上。

学位請求論文最終試験報告書

劉 淙淙

右の者について、学位請求論文に関する審査及び最終試験を行い、その結果審査に合格したものであることを認める。

平成二十九年三月三日

審査委員 主査 半田 美永

(本学教授)



副査 上野 秀治

(本学教授)



副査 大島 信生

(本学教授)

